

論説

『諸王統史明示鏡』の著者と成立年

山口 瑞 鳳

はじめに

rGyal rabs namis kyi byung tshul gsal ba'i me long 『諸王統の歴史を明かに映し出す鏡』という名の chos byung 仏教史は我が国では『王統鏡』の訳名で知られている。この書物はチベットの古代史についてかなり詳細な記述をしているが、著述がティソン・デツェン Khri srong Ide brtsan (742~797) 王時代の中心地サムエ bSam yas で行われている点から原史料の価値に期待が寄せられる点でも重要である。ただ、その成立については内外の学界で未だ確認を終えていない。その点で利用者を少なからず困惑させている。本稿ではこの書物の著者と成立の時期を明確にしたいと考える。

『諸王統史明示鏡』の著者と成立年 山口

第六十卷 一

この書物の訳名を『諸王統史明示鏡』とするのが原意に⁽²⁾、その略称を以下に用いて話を進めたい。

I

『明示鏡』の著作年次について決定的な影響を与えた記述はトゥッチ G. Tucci 氏の名著 *Tibetan painted scrolls* (p. 141) の中にある。トゥッチ氏はラウフェル B. Laufer がこの著作年次を一二二八年としたこと⁽³⁾に反対して、もっと後年の作だとした。『明示鏡』中にはブトゥン Bu ston の『仏教史』はもとより、『赤冊』*Hu lan deb ther* (≡ *Deb ther dmar po*) からの引用もあるから、前者が著述された一二四七年以後の成立であると説明している。ここまでの主張の中でもブトゥンの『仏教史』の成立が一二二二年 (SRD, f. 203a, l. 4 但し、編者奥書き) であるためトゥッチ氏の主張は部分的に成立しない。ただ、『赤冊』の成立が一二四六年⁽⁴⁾であるため、一二二八年説に対する反対は有効である。

しかし、そのあとに続けてトゥッチ氏は云う。≪we notice that it is also later than gZhon nu dpal, because it quotes the *Deb ther sngon po* by this author. ≫⁽⁵⁾ 『青冊』*Deb ther sngon po* は一四七六年に書かれたから『明示鏡』成立の「土のえ辰」sa pho 'brug は一五〇八年以前にはならないと云うのである。トゥッチ氏はこの時、問題について典拠を指摘せず、その註 (TPS, p. 260, n. 244) に ≪Thomas, *Literary text*, p. 202 notices this fact:… ≫としてゐるが、指摘の箇所⁽⁶⁾に該当するものがなく、これは同書 (TLT, I), p. 293 の誤りと考えられる。そのドナーテンス F. W. Thomas は示して云う。≪It (≡ 『明示鏡』) is later also than the *Deb ther sngon po*,

which it cites (fol. 33a, 5) under the title *Deb sngon*. ≪p>

今、『明示鏡』を見ると該当部分に指摘の記事はない。代りにダライ・ラマ五世の『年代記』⁽⁷⁾を見ると、そこに(DSG, f. 33a, 1. 5) *debs chos khang* シェンヌンルの『青冊』とあり、トーマスが五世ダライ・ラマの『年代記』を『明示鏡』と誤認してゐたのを知る(TLT, II, pp. 33-34)の引用文にも『年代記』の一節を用いて『明示鏡』と呼んでゐる。

トマツチ氏はこの点を確認せず、再び *The tombs of the Tibetan kings*, (p. 19) に “Sa skya dpal ldan bla ma chos ‘byung” が、『學者の宴』 *mKhas pa'i dga' ston* によつて典拠として指示されてゐるのによつて註記(TTK, p. 79, n. 47) これを『明示鏡』と認めながら一五〇八年著作と繰り返した。

II

サキヤン Sa skya pa のペンゼンリヤ dpal ldan bla ma と呼ぶ、ンナム・ゲルンホン Bsod nams rgyal mtshan とゾン⁽⁸⁾ 一般にサキヤンチホン Sa skya paq chen やンソ⁽⁹⁾ Phags pa と並べたサキヤ派の「三大僧」 dMar po nam gsun ⁽⁹⁾に数えられたゾヤタマン・ンナム・ゲルンホン bla ma dam pa bSod nams rgyal mtshan (1312~1375) 以外に考えられなく。このゾヤタマンが主としてサムエで著作したことはサキヤ派の叢書『道果』 *Lam 'bras*, Vol. Ka, *bla ma'i rnam thar* (ff. 193b-203 b, 210 a) 中に、また「仏教史」を著作したゾン⁽⁹⁾ Sa skya gdung rabs (ペンサン氏蔵本 f. 156 b) に夫々示されてゐる。

なお、トゥッチ氏の云う『学者の宴』中に引用の dPal ldan bla ma dam pai chos 'byung の一節は『明示鏡』(GSM, ff. 93b-94a) 中に確認されるが、他に『学者の宴』(KGG, f. 89a, l. 2) が、“Sa skya bla ma dam pai chos 'byung 説として『明示鏡』(f. 85b, ll. 5-6) から引用しているのが見られる。同じ頃のベンチェン・ナム・タクン Pan chen bSod nams grags pa (1478~1554) の『新赤冊』*Deb dmar gsar ma* (デンサン氏蔵本 f. 4a, l. 5) にも“dPal ldan bla ma'i chos 'byung me long ma”とあり、引用箇所は『明示鏡』(f. 3b, ll. 5-6) 中に同様に確認される。

トゥッチ氏はその後多くの内外学者に採用された。例えば、わが国では佐藤長氏が『古代チベット史研究』(p. 10) で取り上げ、稲葉正就、佐藤長両氏による『フツラン・テプテル』(p. 13) 中にも継承されている。

筆者は昭和四一年に「古代チベット史考異」の中でその誤りを指摘しておいた(『東洋学報』四九一三、註7、同四九一四、九六頁、訂正)。ヨーロッパの学者のうちでもマクドナルド A. Macdonald 夫人は“Préambule à la lecture d'un rGya-Bod yig tshang”中にトゥッチ説に従えないことを述べ(p. 55) 一三八八年か(p. 71) 一三三四年(p. 157) ではないかとしている。なお、トーマスがダライ・ラマ五世『年代記』を『明示鏡』と混同した点はスタン R.A. Stein 氏が一九五九年、その著 *Recherches sur l'épopée et le barde au Tibet* (Paris 1959, p. 173, n. 50) 中に指摘している。しかし、『明示鏡』の成立時期についてはトゥッチ説を引くに留めている。

III

筆者の試みた批評と部分的に同じ説が、既に一九六二年ヴァストリコフ A.I. Vostrikov の *Tibetskaya istori-cheskaya literatura* 中に示されていたのであるが、残念ながら近年手にした一九七〇年の英訳本 *Tibetan historical literature* ⁽¹⁴⁾ によってしか確かめられなかった。ヴァストリコフは『明示鏡』成立年次についてトーマスの誤を指摘した点までは筆者と同じであるが、この功は上述のようにスタン氏にある。

ヴァストリコフは『明示鏡』の著者をラマダムパ・ソナム・ゲルツェンではないという。この著者に当てれば、「土のえ辰」は一三二八年にしかならず、この年では著者満一六才の時となってしまうから不当であるとす。内容上からも一五世紀前半より遡ることが出来ないとして、一三六八年に滅亡した元の順帝に対する言及があることを云い (THL, 73) 更に、割注に明朝に移ったことが言われていることも指摘する。割注は後に触れるように著作時のものではないと考えるべきである。ヴァストリコフは他に一五世紀初頭に及ぶヤツェ Ya tshé の王統について『明示鏡』が言及するとしている (THL, p. 74) が、その考証は全く欠けている。

ヴァストリコフの所説を点検するため、先ず、ヤツェ王統の問題を吟味してみよう。ヤツェでは古い頃に王統が絶えて ⁽¹⁵⁾ プラン Pu rangs からソナムデ bSod nams sde を迎え、プニスマル Puri smal と改称し、その子プラティスマル Prati smal と大臣ヘルデンタク dPal Idan grags の時代に至ると、ラサのチョカン (大招寺、トゥル

ナン)に黄金の屋根を寄進して載せた。このように示す『明示鏡』の記事(GSM, f. 102a, l. 5)をウァストリコフは問題にするのである。この旨は『学者の宴』(KGG, f. 142b, ll. 1-2)にも述べられていて、『プトゥン仏教史』と『ヤルルン・チョオ Yar lung jo bo 仏教史』⁽¹⁶⁾に拠ると示されている。この点は『明示鏡』がセルトクパ・リンチェン・ドルジェ gSer thog pa Rin chen rdo rye の記録に拠るとしているのとやや異っている。

今、『プトゥン仏教史』を見るとヤツェ王に関する記述はない。従って、『学者の宴』は『ヤルルン・チョオ仏教史』を引用したものと考えられる。この書物の成立時期がわかれば、ヤツェ王プリティスマルはそれ以前の人物とみなされるので、この問題を解いてみよう。

『明示鏡』(GSM, f. 103b, l. 1)によると、この『仏教史』はラツゥン・ツルティム・サンポ lHa btsun Tshul khriims bzang po によって書かれた。彼はカダク・タクパ・リンチェン mNga' bdag Grags pa rin chen の第三子で、父の方はバクバ Phags pa (1235~80)に随行して元朝を訪れたとされる(*op. cit.*, f. 103a, l. 4)。これによれば、ツルティム・サンポの方はプトゥン (1290~1364)とほぼ同時代またはやや先の人物と推定される。

『プトゥン仏教史』には『ヤルルン・チョオ仏教史』からの引用はない。『赤冊』にも本文にはその引用はなく、割注のうちのみ『チョオワの仏教史』Jo bo bari chos 'byung によるとしてそれがある(HLD, p. 15a, ll. 3-7)。即ち、その本文では、トケンテムル Tho gan the mur 順帝が一三三三年⁽¹⁷⁾に登位して、至順⁽¹⁸⁾、元統、至元年在位して滅んだと示されているので、この割注は一三六八年以後に入れられたことがわかる。問題の引用文はそ

の後にくる。ここでは、はじめに順帝が登位するまでの経緯を述べ、最終部分に⁽²⁰⁾

その後、水のと酉（一三三三）年六月八日に登位し、王位に四年まします。⁽²¹⁾

と示し、それに続けて、一三五八年の事件と一三六八年の順帝滅亡の記事を継ぎ足しているが、これは『ヤルン・チョオ仏教史』からの引用ではない。つまり、「チョオワ」即ち、ヤルンチョオの『仏教史』は上記引用文が示すように一三三三年登位後第四年の一三三六年に書かれたものであることがわかる。これでヤツェ王ブリティスメルが一三三六年以前の人物であると云えるのである。

『学者の宴』はこの王と大臣がサキヤ寺の法座 *chos khri* の上にも黄金の屋頂を献じたと述べているが、この点に關しても云うべきことがある。当のサキヤ派でもゴルチェン・クンガ・サンポ *Ngor chen Kun dga' bzang po* (1382~1456) がヤツェ王ハステイラーシヤ *Hasti radza* に寄せた手紙 (*Ngor chen Kun dga' bzang po'i bka' 'bum*, Vol. A, f. 359 a, 1. 6-f. 360 b. 1. 5) の中々

昔のヤツェの大法王たちが……栄光のサキヤ大僧院において大乘の法吼が行われる法座の上に、宝の黄金の大屋根を良質の黄金の頂きで飾る御寄進をなさったが、長い時の力で古くなり、破損してしまった。これらを以前のように修理して下されば結構である。富はうつろい易く、確たるものがないことを知り、……報いを求めない広大な施しをなされたまえ。

と述べている。この要請は *Ngor dgon* を建立した一四二九年以前のことと思われる。⁽²²⁾ 修理の要請を寄せた「法座の黄金屋頂」の寄進は文面から察して相当昔のことしか考えられないので、これだけによっても、ヴァス

トリコフが『明示鏡』の成立を十五世紀にもつてくることは認められない。まして、ブリティスマルの生存時代が一三三六年以前と確認されているので、その説は全く成立の余地がない。

IV

ヴァストリコフは『明示鏡』の著者をソナム・ゲルツェンでなく、シュカンワ・レクパシエラブ gZhu Khanng ba Legs pa'i shes rab だとして、その生存時期を考証する (THL, pp. 74-75)。根拠としてダライ・ラマ五世の *Iha ldan sprul pa'i gtsug lag khang gi dkar chag shel dkar me long* (f. 6 b, l. 5) 中に「著作者」 rtsom pa po の名でレクパシエラブに言及があり、ロントル・ラマ kLong rdol bla ma もその著作中 (Vol. Ma, f. 62 a, ll. 4-5) にシュカンワ・レクパシエラブの『明示鏡』と述べている旨を取り上げる。ロントル・ラマがダライ・ラマ五世に従うのは、宗派的立場から殆んどやむを得ないことであつて別の典拠にはならない。

ヴァストリコフは『ブムド仏教史』 *Deb ther rgya mtsho* (dKkon mchog bstan pa rab rgyas: *Yul mdo smad kyi ljongs su thub bstan rin po che ji llar dar ba'i tshul gsal bas brjod pa deb ther rgya mtsho*, 1883, 412 fols., f. 8 a, ll. 2-3) を引用して、レクパシエラブが『明示鏡』を出版し、「著者奥書き」 rtsom byang に rtsom byang・ソナム・ゲルツェンの著作とされている旨も紹介した (THL, p. 74) のに止らず、更に、ラサ版の「出版者奥書き」 par byang に出版者をレクパシエラブとし、出版年を「土のえ戌」の年としている旨も伝えた。この奥書きはラサ版のものであるから、デルゲ版には当然欠けている。このことも彼は書きそえている (op. cit., p.

(75)。つまり、反証をみな挙げながら、それにもかかわらず、ダライ・ラマ五世の言葉を採用して「the author the above-mentioned Legs-pai shes rab」(ibid.)とし、ラサ版出版年の「土のえ戊」を一四七八年と数えて、「the text was obviously compiled somewhat earlier — most probably in the middle of the 15th century」を加えながら結論としている。

これは、ダライ・ラマ五世より先にペンチェン・ソナム・タクバや『学者の宴』が『明示鏡』をラマダムパ等の名で引用していることを知らず、ヤツェ王の生存年代を誤って比定し、更に、以下に述べる本文の記事(GSM, f. 12b, 1. 3)をよく読まず、後代に入った割注を本文と同時に書かれたものとみなしたため、誤った確信をもってダライ・ラマ五世の妄説を採用したものである。勿論、その結論には従うべきではない。

V

一九六六年英文で示されたクズネツォフ B. I. Kuznetsov 氏の *the Gyäl rabs gsal ba'i me long* の序 (p. ix) は、ラサ版を見た上でヴァストリコフ説を採用しかねて、著作年を一三二八年とした場合の早くなり過ぎる欠点に対して一つの説明を考案した。それによると、サキヤパ・ソナム・ゲルツェンが「probably has been compiling (or began to compile) it in the earth-male-dragon year (1328)」というのである。しかし、著者奥書きには「この年サムエ大僧院で “legs par bsgrigs pa ‘dis” 「よく編纂したこの書物を以て」と書いてこのあとに願文をしるし、全篇が閉じられている。願文は書き終った書物の功德を廻向しているのである。

クズネツォフ氏は“legs par sgrigs pa ‘dis” という形を採用するが、文法的には誤りである。“dis”「これ(書物)により」と云う語を伴う限り、その直前の分詞形は必ず objective 型の形を取らねばならぬので、未来、過去二形のいずれかであり、常に前接字“ba”をもつ形である。従つて“bsgrigs pa”となり、過去を表わす。クズネツォフ氏の示す“sgrigs”の形は命令形であり、もし“sgrig”の誤りであるなら subjective 型の意味しかもたず、“pa”を伴つて“dis”の直前に用いられることはありえない。更に“bsgrigs par byas”等の形が用いられていないから“I have been compiling”の意味である。更に“I have written”“I finished”“I compiled”の意味にならないとも云うが、同氏によつて示された形は使役法の過去形であり、“I have written”等の意味には用いられない。また“I have written”等の意味は“bsgrigs pa”によつて立派に表わされる(Jäschke's Dic. p. 120 a)。

クズネツォフ氏はヴァストリコフの *Tibetskaya istoričeskaya literatura*, p. 195 (英訳本 p. 77, n. 240) によつて “It is the usual Tibetan manner to give not the date when the work was written, but the date when it was started” と述べるが、ヴァストリコフの所説では、文中に著作年次を議論する場合に(著作が完成していないから)著作をはじめた年が議論されるとあるので、著者奥書きの場合について云うのではない。事実、同箇所『青冊』の場合について奥書きに著作完成時が示されていることをヴァストリコフは述べている。筆者の見解は、クズネツォフ氏と正反対であり、一般に著者奥書きでは著作の終った時期が“yi ger bkod pa”, “bkod pa”, “bsdebs pa”, “sdyar pa”, “bris pa” などと示され、長期にわたつた著作について屢々著作をはじめた (“ngo rtsom”, “ngo gtsug”) 時期が示されることもある。

クズネツォフ氏は「土のえ辰」の年をラマダムバの生存年代中に当てると一三二八年以外が来ないのを動かぬものとして、これを通用させるための解釈を考案して文法を歪曲した説を右のように述べたのであり、到底受け入れられるものではない。

ウライ G. Day 氏は一九七二年に発表した論文⁽²⁴⁾のうちにマクドナルド夫人が『明示鏡』の成立を一三七三年と示した旨を伝え、同夫人の“Une lecture des Pelliot tibétain……”の末尾に⁽²⁵⁾ (p. 391) に “Le rgyal rabs et son auteur” の発表を予告しているが、今日なお未見であるので、これに触れず筆者の見解をしるすことにする。

VI

既に見たように『明示鏡』の著者はラマダムバ・ソナム・ゲルツェンである。著作年次は、誤伝でなければ「土のえ辰」であり、著者の生存年代のうちに求めるなら一三二八年にしかならない。これが記述内容から云って当時一六才の著者のものとは考えられない。その点はヴァストリコフの云うとおりにある。とすれば、よくあることであるが、十二獣と五元の「男・女」の誤伝、誤写⁽²⁶⁾を疑わねばならない。筆者は“sa pho 'brug” *ལེ་ཏེ་གཤམ་* を“sa pho spre” *ལེ་ཏེ་སྤེན་* 「土のえ申」の誤写に由来すると考えている。理由は次のようである。

『明示鏡』は元の順帝に言及して (GSM, f. 12b, l. 3)

トケンテムルが王位を四八年保ってなお (今日) 王国に君臨しているのであると云う。⁽²⁷⁾ 「この後王位はシナの大明王に奪われたと云われる」

『諸王統史明示鏡』の著者と成立年 山口

第六十卷 一一

と示している。右の「」内は小字割註部分である。著者が書いたとしても「この後」*di nas* とあるから著作時ではないことがわかる。これと似た例が先に言及した『赤冊』中の順帝の登位と在位に関する記事(六一七頁参照)についても見られた。本文の記述と全く異った事態が公表時に起きていたためこのような註記がいずれの書にも必要になったのである。『赤冊』の割註には、王位を三七年⁽²⁸⁾保ったとあるが、実際は三六年である。『明示鏡』には四八年とあるが、これは十二支一運を誤って計算したものと考えねばならない。この仮定に従えば、本文中で言及している時期は一三六八年そのものになり、なお滅亡を知らなかったものと理解される。従って、後にその次の割註が入ったわけである。

『明示鏡』はサキャ派一般にソナム・ツェモ *Bood nams rse mo* (1142~82) 以来用いられてきた仏滅紀元を用いている。このあたりの研究はマクドナルド夫人も既に示しているが、ソナム・ツェモは仏滅紀元を西紀前二一三三年相当としている。『明示鏡』はこれに拠る (GSM, f. 5 b. l. 6) としながら、帝師クンガ・ロドゥク *Kun dga' blo gros* がチベットに帰って具足戒を受けた一三三二年について、先ずプトゥンが示した計算を示す。⁽³⁰⁾ この方法によれば、一三三二年は仏滅後三四五五年を過ぎて三四五六年目であると云うことになる。しかし、仏滅の年を第一年として、一三三二年を三四五六年目とすれば、仏滅第一年は (3456 - 1322 = 2134) 二一三四年となり、仏滅を二一三三年とする立場と一年の差が出る。この種の計算をマクドナルド夫人も誤って示している場合があるが、⁽³¹⁾ 仏滅第一年を西暦で見るとは仏滅紀年序数から西暦年序数を単純に差し引かねばならないのである。つまり、紀元元年と紀元前第一年が別の年として背中合せになっているからである。ここでは、当然、一三三二年は仏滅後三四五四

年が過ぎ（das 十二月三日を三四五四回越える意味）、三四五五年にあたと云うべきだったのである。

『明示鏡』は続いて、自らの著作時点での計算を示して次のように云う（GSM, f. 6a, ll. 1-2）

仏法が五〇〇年単位の一〇の間存続すると云われる「教（lung）の三時期」のうち、（今日では）「阿毘曇行時」（の五〇〇年）が過ぎ、「經部行時」（の五〇〇年）のうちの二年が過ぎた後では、その残りは四九八年であり、（次にくる）「律部行時」の五〇〇年一期（があるの）で、「教（bstan pa mshan nyid pa = lung）（の三時期）」中に九九八年が（残っている。それと）「しるしだけを保つ時」の五〇〇年（を合算する）と一四九八年がこの後に続いて起ると（聖典は）述べておられるのである。

これによれば、仏滅後既に六期の五〇〇年、即ち、三〇〇〇年が過ぎ去り、「教の一五〇〇年」の中の五〇〇年と二年が終れば、五〇〇〇年が悉く尽きるまでに残すところあと一四九八年があるとされている。

今、『明示鏡』がこれらの数値を用いて正確に計算をしていたとすれば、著作時を、3502-2133 = 1369、即ち、一三六九年となすべきであるが、この著者は実際の計算に当って先述のようにプトゥンの説を用い、仏滅年を紀元前二一三四年になるような計算をしているので、現時点は

3502-2134 = 1368

となり、一三六八年と示されるのである。

マクドナルド夫人は既にこの問題を取り上げながら、⁽²²⁾計算の誤りと、上記一文の解説に当って、それが現時点を示す意味であることを看取しなかったもので、『明示鏡』の成立は一三六九年以前ではないと結論を下したのである。

以上に見たところから、既に述べたように『明示鏡』の著作時は一三六八年の「土のえ申」「sa pho spreI」を誤って「土のえ辰」「sa pho 'brug」と誤り写したものと云うことが出来る。“brug”が“spreI”から誤って写されることは行書体の写本段階では充分ありうることを加えておきたい。この年は一三七五年に歿したラマダム・パンナム・ゲルツェンの晩年に当り、すへての問題が解決されるのである。

(東京大学文学部助教 東洋文庫研究員)

監訳者

- DSG: Ngag dbang blo bzang rgya mtsho: *Gangs can yul gyi sa la spyod pa'i mho ris kyi rgyal blon gts'o bor brjod pa'i deb ther rdzogs ldan gzhon nu'i dga' ston dpyid kyi rgyal mo'i khu dbyangs*, 1643, Zhol ed., 113 fols., タハヤ・トヤ五冊『米七記』
- GSM: bla ma dam pa bSod nams rgyal mshan: *rGyal rabs nams kyi byung tshul gsal ba'i me long chos 'byung*, 1368, sDe dge ed., 104 fols.
- B.I. Kuznetsov: *rGyal rabs gsal ba'i me long*, Tibetan text in transliteration with an introduction in English, Leiden 1966.
- HLD: Tshal pa Kun dga'rdo rje: *Hu lan deb ther* (= *Deb ther dmar po*), 1346 (= *The Red annals*, Gangtok ed., 40 fols, 1961) 『米肆』
- KGK: dPa' bo gtsug lag 'phreng ba: *Chos 'byung mkhas pa'i dga' ston*, Vol. Ja. "Bod kyi-rgyal rabs", 1545, IHO brag gnas ed., 155 fols., 『米肆S論』
- PLG: A. Macdonald: *Préambule à la lecture d'un rGya-bod yig tshang, Journals Asiaticque*, 1963, pp. 53-159.
- SRD: Bu ston rin chen grub: *bDe bar gshegs pa'i bstan pa'i gsal byed chos kyi byung gnas gsum rab rin po che 'i mtzod*, 1322, sDe dge ed., 203 fols., (タヤ・ハヤ公教氏 f. 117 b 次(下) 『ハムハン公教氏』)
- THL. A.I. Vostrikov: *Tibetan historical literature*, translation by H. Chandra Gupta, Calcutta 1970 (*Tibetskaya istoricheskaya literatura*, Moscow 1962).
- TLT, I: F.W. Thomas: *Tibetan literary texts and documents concerning Chinese Turkestan*, part I, literary texts, London 1935; TLT, II, part II, documents,

London 1951.

TPS : G. Tucci : *Tibetan painted scrolls*, 3 vols, Roma 1949.

TTK : G. Tucci : *The tombs of the Tibetan kings*, Roma 1950.

『書冊』 'Gos lo tsā ba gzhon nu dpal : dByod dlan skal bzang jongs kyi mgrin gyi rgyan deb ther sngon po, 1478, Kun bde gling ed., 486 fols., G.N. Roerich : *The Blue Annals*, 2 vols., Calcutta 1949, 1953.

『字書の要』 KGG 参照。

『赤冊』 HLD 参照。

『年代記』 DSG 参照。

『フヤラン』 稲葉正統、佐藤長記(註、研究) 『フヤラン・チベット』 京都、一九六四、『赤冊』の全訳

註

- (1) GSM, f. 104 a, 1. 5.
- (2) gsal po は「明かなる」を意味する。なか、' gsal ba は、今日別の動詞とみなされて' gsal ba 「明かなる」がこれを' gsal 除外する、割算する。(Chos grags' Dict. 参照)の異字もあり、屢々以上の意味で用いられる。sel ba 「除く」も同語根の語と思われる。本書の題名の場合

『諸王統史明示鏡』の著者と成立年 山口

明かなる」はその前にある「諸王統」と連ならなくとも動詞としての解釈しなければならぬ。

- (3) B. Laufer : Loan-words in Tibetan, *T'oung-Pao*, 1916, p. 413, n. 1; Die Bruža Sprache und die historische Stellung des Padmasambhava, *T'oung-Pao*, 1908, p. 39.
- (4) 『フヤラン』 pp. 15-17 参照。
- (5) G.N. Roerich 著の書 *The Blue Annals* (略号表『書冊』参照) の序文 p. 1 に ≪composers……between 1476 AD and 1478 AD≫とある。なか、文中に屢々「現在の火の申の年(一四七六)まで」の書かれたりする (Vol. Na, f. 140a; Ta, f. 11 a; Da, f. 12 b; Pha, f. 24 b; Ba, f. 5 a, 10a)

- (6) 略号表 TLT, I. 参照。
- (7) 略号表 DSG 参照。
- (8) KGG, f. 131 a, 1. 1.
- (9) *klong rdol bla mai gsung'bun*, Za, f. 31 b, 1. 1.
- (10) KGG, f. 149 a, 1. 4 に *stob yid yan* が、その中の真贋判定に述べられている。註(一)参照。
- (11) Pan chen bsod nams grags pa; *rgyal rabs 'phrul gyi lde mig* (*Deb ther dmar poi deb gsar ma*) 1538, 80 fols. 近年、マハチ氏が校訂本に記注を添えて公刊した。

- G. Tucci: *Deb ther dmar po gsar ma*, Roma 1971.
- (12) 近年で『キリシタン・ホール E. Haarth 氏の *The Yarlung dynasty*, København 1969, p. 21, n. 58』で『ウ』の説が用いられた。
- (13) 略号表 PLG 参照。
- (14) 略号表 THL 参照。
- (15) ヤツヤ Tshe の前王統のノウスマル Re'u smal の子とその従兄弟の頭、この系統は断える (KGG, f. 142 a, 1. 6-f. 142b, 1. 1) が、ノウスマルはインドにも領土を拡げ、「かねのえ戌」の年にラサ大招寺の本堂の屋根を金と銀とで覆った。それをこの後に新王統のプニヒメル Punye mal が黄金の屋根を拡張した (*op. cit.*, f. 149 a, 1. 2) と記されている。このプニヒメルとはフニヒスメル Puni smal のことと思われる。また、プリティメル Prii mal と見えるのはプラティ (ス)メル Prati smal と同じであろう。
- (16) ヤルンチョオとその仏教史については佐藤長「ダルク王の子孫について」『東洋学報』四六—四、一九六四年、三四—七四頁) の六三—六六頁参照。
- (17) 「水の息子」chu pho byi hai lo は「水のと西」chu mo byai lo (一三三三年) の誤りでせよ。
- (18) 登位して元統になるから実は至順は含まれない。
- (19) 割注の部分は四つの部分から成る。第一の部分 (I. 1-2) には順帝が三七年支配し、申の年の六月に大都を捨て蒙古に離れたと云い、第二の部分 (II. 2-3) では、当時大都にいたクンガ・リンチェンの報告では羊の年の五月一日に蒙古に逃れたというからこれが正しいと云う。第三がヤルンの『チョオワの仏教史』による部分 (II. 37) であり、最後の部分 (II. 7-9) には順帝登位後三八年として土のえ戌 (一三五八) の年の事件を述べた後、第一の部分と異って、土のえ申 (一三六八) の年八月二十九日に順帝が大都を捨てたとしている。『フツラン』p. 81 の訳文は第三の部分と第四の部分の区別していない。
- (20) 註(19)参照。第三の部分の最後。
- (21) 登位した年を第一年として第四年目を云うので、一三三六年になる。ここまでを『チョオワの仏教史』としなければ、何故このような文があるのか不明になる。チベット の史書では著作年次をこのような形で示すことが多い。本文『明示鏡』の場合及び註(5)参照。
- (22) この要請は自らの僧院・ホル・グン Ngor dgon について責任の生ずる (一四二九年) 以前、サキャ本寺について要請したと思われるが、ここでは必ずしもその確認を する必要はない。
- (23) 筆者もかつてシェカンワ・レクベシエラプの『明示

鏡』とされるものを全く別の著作と理解していたことがある(『東洋学報』四九—三、一九六五年、二九頁、註7)。

(24) G. Uray: The narrative of legislation and organization of the mKhas pa'i dga' ston (*Acta Orient. Hung.*, XXVI, 1, 1972, pp. 11-68) p. 15.

(25) A. Macdonald: Une lecture des Pelliot tibétain 1286, 1287, 1038, 1047 et 1290, (*Études tibétaines*, Paris 1971, pp. 190-391)

(26) 古代チベット史の場合は十千の表示がなかった場合が殆んどで、先ず、十千の正否のみを考えるが、『明示鏡』の場合では十二支、十干が揃っていたのでどちらかの誤写を考える。特に写本に用いられたウメ体の場合から字形を考えるべきであろう。

(27) "rgyal khams la dbang thob pa yin zhes" 「王國に君臨している」と云われる。」

(28) おそらく、至順を一年余分に数えているのであろう。

(29) PLG, pp. 67-69. マクドナルド夫人はサキャ派の伝統的見解をサキャペンチェン Sa skya pan chen の説によつて示す。仏滅から一二二六(一二三六は誤植)年まで三三三四年経過したというので、仏滅を紀元前二二三三年とする。この見解がソナムツェモ以来のものであり、ヴァストリロフが既に指摘してゐる (n. 58 (*op. cit.*, p. 121))

『諸王統史明示鏡』の著者と成立年 山口

に述べている。しかし、他方では Suregamati の報告として、仏滅を紀元前五七四年とするヘルデン・ラマダムバの説なるものも示してゐる (*ibid.*, p. 69)。但し、何処に由るかには検討してゐない。

(30) PLG, p. 66; p. 117, n. 53 参照。

(31) マクドナルド夫人がカチェンペンチェン・シャキシェリ Kha che pan chen Shākya chri の説を取りあげた時、シャキシェリが一二〇七年にソルナク・タンポチェ Sol nag thang po che にあつて、この一二〇七年迄に仏滅後、一七五〇年が過ぎ去つたとしてゐるのを取り上げ、仏滅を紀元前五四三年としてゐる (PLG, p. 67)。これは一七五〇年が過ぎ、一七五一年目にいるという意味である (GSM, f. 6a, l. 1 の表現参照)。即ち、紀元五四四年を第一年として一七五一年までに一七五〇年が過ぎ去つたとしてゐるのである。わかりやすく云うと、一年が過ぎたと第二二年目にあるとの意味になる。今、紀元前何年に仏滅があつたかを知るには、仏滅紀元で第何年目かを知り、それからその時の西暦紀年数を単純に減ずればよいのである。経過年は十二月三十日の経過回数であり、紀元何年というのより一年少なくなつてゐるから注意を要する。年の経過は年度の変り目が基準になつていて、発生時を云うのではないことにも注意すべきである。曆学書『ヘカルシエ

第六十卷 一七

ルン』*Pad dkar zhal lung* (Ka, f. 4b, ll. 2-3) とは上記と同じことを次のように示す。

また、ペンチェン・シャキャシュリーがタンポチエで火のと卯(二二〇七)の年に計算したところでは、仏が滅してからこの年の前年火のえ寅(二二〇六)の年までに一七五〇年が過ぎ去ったのである (song ngo) と示されている。

即ち、仏滅の年の暮までを一年と数え、その後は各年末までを一年と数えて、二二〇六年までを一七五〇年のうちに数えているのが見られる。従って、仏滅年は

$$1750 - 1206 = 544$$

紀元前五四四年となるのである。

(32) マクドナルド夫人は二三六九年として正しい計算をしているが、『明示鏡』の著者はそのように正しく計算していなかったのである。